方言を理解・伝承するための「白峰方言検定」の実施と、白峰地区における屋号の記録と言語学的整理と分析

指 導 教 員：金沢大学　人間社会研究域歴史言語文化学系　教授　　加藤 和夫
協力参加教員：金沢大学　人間社会研究域人間科学系　　准教授　清水 邦彦
参 加 学 生：澤田　彩・荒井 美有希・高森 麻衣・中川 智絵・野村 麻衣・宮本 広美・
池上 麻貴子・高橋 彩佳・長谷川 栞・松橋 美祐紀（以上、加藤ゼミ生）
柴山 和範・川田 拓磨・福井 菜実子（協力参加学生）

１．調査研究成果要約

本研究で調査対象とした「屋号（やごう）」とは，武士や許可を受けた豪商・豪農以外には名字（みょうじ）（姓）を公称できなかった江戸時代までの地域社会で，家を呼ぶための通称として通用していたものをさす。屋号（家号（やごう）と表記する場合も）は，地方により「門名（かどな）」「家名（いえな）」などとも呼ばれる。

今回，当ゼミが取り組んだ標記課題による研究は，白山市白峰地区の白峰雪だるまの里協議会の提案を受け，伝統的に白峰地区で用いられてきながらも，地域社会の近代化や社会構造の変化等に伴って忘れられつつあるある屋号を正確に記録・整理し，それらを言語学的，方言学的に分析・考察することで，白峰地区の人たちに，屋号の持つ歴史や特徴，またそれが家の通称として果たしてきた役割等を再評価してもらう手がかりとしようとするものである。

そのために，当ゼミでは昨年（2011 年）の 9 月下旬の第一次調査（本調査）と 12 月上旬の第二次調査（補充調査）を実施し，その結果，白山市白峰地区の白峰本村の約 250 戸，桑島の約 70 戸の家に対する通称としての屋号を記録することができた。

記録した屋号については今も整理・分類等を進め，最終報告書に向けて言語学的，方言学的分析を進めている途中であるが，白峰地区の屋号については人物名（初代・先祖の名，現世帯主名，及びそれらの簡略形）による屋号がその命名法の大部分を占めることが確認できた。また，調査では，本来なら一つの通称に統一されているべきと思われる屋号が，話者により必ずしも完全に一致するとは限らないという興味深い事実も確認された。白峰地区（特に白峰本村）には，集落内に同姓の家も多く，現代日本社会の一般的な家の呼称として用いられる姓（姓＋さん）だけでは，各家の区別が難しく，屋号の利用価値は少なくないと思われるが，若い世代に向かって確実に使用機会が減少していることも伺えた。

２．調査研究の目的

上でも述べたように，標記課題による今回の調査研究では，まず，白峰地区の白峰本村と桑島の 2 集落で用いられてきた屋号を，現時点でできる限り多く，正確に記録することを第一の目的とした。

屋号というと従来は民俗学の調査・研究の対象とされることが多かったが，地域社会の家に対する通称という機能を考えれば，それは個々の人物に対する呼称と同じように，言語記号の一部であり，その形態，命名動機，本来の形態からの音韻変化など，言語学的な（地域社会の言語現象であることから方言学的な）研究対象ともなり，この 30 年ほどの間に，全国各地で屋号の調査研究が行われるようになってきた。

当ゼミ指導教員の加藤も，これまで，出身地の福井県嶺北地方（特に越前市）や同県若狭地方の三方郡美浜町で屋号の調査・分析を行ったことがあり（加藤和夫 2003「命名―美浜町の屋号命名の型―」『わかさ美浜町誌 美浜の文化 第5巻 語る・歌う』所収），ゼミ生の一人である3年生の高橋も卒業論文で自身の出身地である石川県鹿島郡中能登町の屋号を研究しようとしている。

加藤，高橋を中心に，当ゼミでは今回の調査研究で記録した白峰地区の屋号について，今後さらに言語学的，方言学的分析を進め，全国の他地域（特に北陸地方の他地域）と比較しての白峰地区の屋号の特色，また，石川県加賀地方方言の中でも周辺の方言と大きく異なる特徴を持つことで“言語の島”として方言研究者に良く知られる白峰方言の特徴（特に音韻的特徴）と屋号の形態との関係などを明らかにすることを目的とし，合わせて，それらの研究成果を白峰地区の方たちにお知らせすることで，地域社会において重要な役割を果たしてきた屋号への理解と再評価につなげ，新たな屋号の活用方法について，提案者でもある白峰雪だるまの里協議会の皆さんとともに考えていく手がかりとすることを目的とする。

３．調査研究の内容

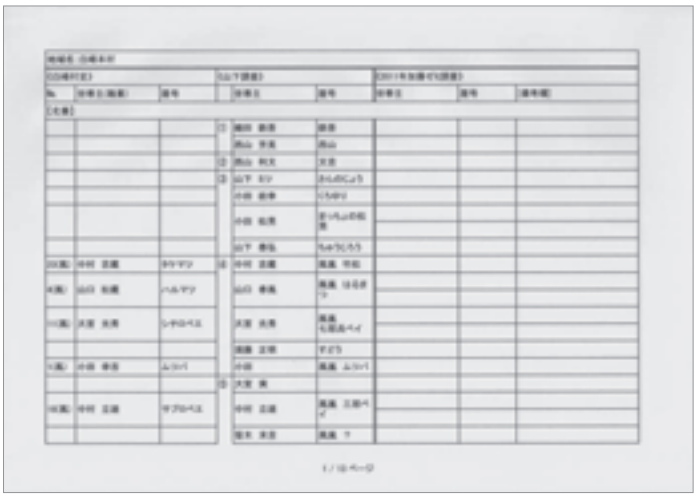
当ゼミでは，課題名のうち，「白山市白峰地区における屋号の記録と言語学的整理と分析」を行うための第一次調査として，2011年9月25日から28日までの3泊4日の日程で白峰地区を訪れた。

課題の提案があった白山市白峰地区の白峰雪だるまの里協議会副代表の山下浩雅氏，及び白峰公民館の協力を得て，白峰地区 4名，桑島地区2名の地元生え抜きの高年層6名の話者（60歳代～90歳）を紹介いただき，調査を実施した。

調査にあたっては，ゼミ生たちが分担・協力して，昭和30年代に刊行された『白峰村史』に載る屋号と，最近の白峰雪だるまの里協議会有志による予備調査資料などをもとに，現在の住宅地図と照合しながら，今回の調査結果が記入できるよう工夫した調査票を予め作成した（右の写真参照）。

調査票では住宅地図に載る現戸主名を真ん中に置き，その左の欄には，それと同じと思われる家の屋号が『白峰村史』で出ていた場合は予め予想形（屋号）として記入し（『白峰村史』に載る片仮名表記のまま），さらに同じ家に白峰雪だるまの里協議会

白峰本村用の調査票の表紙



白峰本村用の調査票の１ページ目のフォーマット

有志による予備調査結果があったものについてはそれに載る表記のまま，その右側に記入し，さらにその右側には今回の調査で確認できた戸主名，屋号（表音的片仮名表記），屋号に関する話者情報などを記入する備考欄を準備した。

第一次調査では，加藤と協力教員の清水（日本思想史），そしてゼミの学生 10 名に協力参加の学生 3 名を加えた 15 名が，白峰本村（話者 4 名）と桑島（話者 2 名）に分かれて，それぞれ約 250 戸，約 70 戸の家の屋号についての聞き取り調査を行った。

第一次調査終了後，現地で調査結果の聞き合わせをしながらの整理作業
（於：白山国立公園センター）

調査結果は白峰滞在中に全員が録音を聞き直しながら，調査票への表音的片仮名表記に誤りがないかを確認しながら，話者ごとのデータとしてエクセルへの一次入力をした。

調査終了後は，白峰で入力したエクセルの一次データに，話者から得られた屋号に関する様々な情報（屋号の元となったと思われる人物名やその漢字表記など）を備考欄に追加入力した。

その後，加藤が 12 月上旬（12 月 3・4 日）に一次データで不明な点などの補充調査を実施し，さらに追加修正した屋号データを統合し，備考欄の内容も整理し，右の写真のようなデータ集（A4 で約 20 ページ）がほぼ完成している。

地域名：白峰本村						
《白峰村史》			《2011年加藤ゼミ調査》			
No.	世帯主（職業）	屋号		世帯主	屋号	〔備考欄〕
【北番】						
			①	織田 鉄吾	テツゴ，テツゴー，イシヤノウチ	
				西山 芳英	ニシヤマ	
			②	西山 利文	ブンキチ	桑島から転居，土建屋，現当主は分家の初代
			③	山下 ミツ	サンノジョー	先代の名前，漢字表記：三ノ丞
				小田 政幸	チューキチマサ	職業に転居，食堂（民宿）を経営していた，漢字表記：久吉政
				小田 松男	マッチョマツ（オ）	マッチョは松男さんの父の名前か？
				山下 泰弘	チュージロ	店の山下裕男さんの店，チュージローは店舗の名前，食堂を経営している，漢字表記：忠次郎
23(風)	中村 吉蔵	タケマツ	④	中村 吉蔵	タケマツ	先祖の名前，漢字表記：竹松
4(風)	山口 松蔵	ハルマツ		山口 春風	ハルマツ	初代の名前
11(風)	大宮 光秀	シチロベエ		大宮 光秀	シチロベー，ミツヒデ（光秀）	世帯主の名前
				須藤 正明	スドー（須藤），スドーサン	世帯主の名前，20年ほど前，青森県から転居
1(風)	小田 春吉	ムツバ		小田 勲	ムツバ	由来不明，ムツバの葉とは秋の葉のこと，川向うから家に葉がのぞくほどの大きな木を，屋号とした，漢字表記：六つ葉
			⑤	大宮 実	シチスケ，ヒチスケ	由来不明，屋号は初代の人名，漢字表記：七助
16(風)	中村 立雄	サブロベエ		中村 立雄	タッチャン，サブロベ，サブロベー	タッチャン：世帯主の名前　サブロベー：由来不明，初代，長男が松任市に在住，今は「お」はあちゃん」だけがずんでいる，漢字表記：三郎兵衛

1 / 17 ページ

現在は，その統合版のデータをもとに，言語学的，方言学的観点から，主に屋号の命名の型と音形（発音）上の特色等の分析を進めている。

４．調査研究の成果

すでに白峰地区の約 320 戸の屋号形式のデータ収集はほぼ終わったので，現在はそのデータの言語学的，方言学的分析の段階に移っている。

加藤がかつて報告したことのある福井県三方郡美浜町の 6 集落の屋号命名の型を，加藤（2003）「命名―美浜町の屋号命名の型―」から紹介すると次ページのようになる。美浜町の 6 集落に見られる屋号命名の型は全部で 11 種類もあり，一番多い集落（丹生（にゅう），早瀬（はやせ））では 9

種類，一番少ない集落（河原市）でも6種類の型が見られる。

また，ゼミ生の高橋によれば，出身地の鹿島郡中能登町小竹の屋号は，ゼンクロサ，ヨシタロサ，トークロサ，ヘーザサ，カトヨモサ，スケタロサ，ゲンヒッサのように，人物名（初代・先祖の名と思われる）に呼称接尾辞「～サ」が付く形で統一されていることがわかる。

このように，同じ屋号でも，地域によって命名の型にかなり違いがあることがわかる。

白峰地区の場合，前ページに示した白峰本村のデータ1ページ目に出ている 14 軒の屋号を，右の美浜町の屋号の型に当てはめて見ると，テツゴ(一)，ブンキチ，サンノジョー，チューキチマサ，マッチョマツ，チュージロ，タケマツ，ハルマツ，シチロベー，ヒチスケ，サブロベーの 11 軒は「1　人物名（初代・先祖の名，現世帯主名）による屋号」にあたり，ニシヤマ，スドーの 2 軒は「4 家の姓による屋号」，そしてムツバは「11 その他の屋号」にあたる。つまり，1ページ目の 14 軒の屋号の 8 割近くを人物名型屋号が占めている。この傾向は，他のページでも同様で，白峰地区では人物名型の屋号が圧倒的に多いことがわかった。ただ，人物名型の屋号の中にも，美浜町の 6 集落では見られなかった「人物名（初代・先祖の名）と現世帯主名の融合形」であるシンサタカシ(シンサという屋号の家から分家したタカシさんの意の命名)，コヨモカズオ（コヨモという屋号の家から分家したカズオさんの意の命名）といった屋号も見られた。ある集落で分家があった場合，白峰地区では「本家の屋号＋分家の戸主名」の形を取るが，加藤の出身地の福井県越前市西部では，分家を意味する方言であるデー，デヤ，アジチ，シンヤ，シンタク，アタラシヤなどがそのまま屋号になるのが普通であり，違いが見られる。今後は，数の多い人物名型の屋号をさらにいくつかの型に分けて整理する予定である。また，数は少ないが，イシャノウチ，ジテンシャヤ，カジヤ（セージノカジヤ），デンキイチベのような「9 生業（職業）による屋号」の例も見られる。ほかには前ページの屋号で言えばムツバが面白く，話者の説明によればムツバ（六つ葉）とは「朴の葉」を指し，川向こうからその家に朴の大木の葉がかかるほどであったところからついた屋号だろうと言う。事実だとすれば，屋号命名の型（動機）として興味深い例であり，屋号がある家をめぐる過去の風景を教えてくれる。

屋号命名の型 ＼ 集落	河原市	丹生	佐田	新庄	早瀬	日向
1 人物名（初代・先祖の名，現世帯主名）による屋号	○	○	○	○	○	○
2 人物名（初代・先祖の名，現世帯主名）の簡略形による屋号	○	○	×	○	○	○
3 集落内の位置と人物名の融合形による屋号	×	○	×	×	×	×
4 家の姓による屋号	×	○	○	○	○	○
5 家の姓の簡略形による屋号	×	○	○	○	○	×
6 集落内の位置と家の姓の融合形による屋号	×	×	○	×	×	○
7 家の姓と人物名の融合簡略形による屋号	×	×	×	×	○	×
8 分家を表す屋号（本家の屋号・姓＋分家方言）	○	○	○	○	○	○
9 生業（職業）による屋号	○	○	○	○	○	○
10 店名・商号等による屋号	○	○	○	○	○	○
11 その他の屋号	○	○	○	○	○	○

福井県美浜町の屋号命名の型

加藤（2003）より

なお，今回の調査では，本来なら一つの通称に統一されているべきと思われる屋号が，話者により必ずしも一致するとは限らないという興味深い事実も確認された。前ページのデータを見ても，1 軒の家に対して複数の屋号が聞かれた家が何軒かある。例えば，ある家については，テツゴ，テツゴー（戸主名「鉄吾」から）という長音の有無による音声変種以外に全く異なるイシャノウチ（「医者の家」の意味だろう）という通称があったり，同じくサブロベ，サブロベー（先祖名「三郎兵衛」か）の音

声変種以外に現戸主名「立雄」の通称タッチャンが聞かれたりという具合である。これに似て，ある家に音声変種レベル以外にも複数の屋号相当の通称が聞かれたケースは以外に多い。このことは，主に先祖名に基づく伝統的屋号が次第に地域社会での通称としての役割を失うと同時に，忘れられつつあり，現戸主の名前や愛称にその機能を取って代わられつつあることが大きな要因と考えられる。

５．調査研究に基づく提言

ゼミ指導教員の加藤が長く研究している方言と同様に，屋号も地域社会の生活の中で長く家を呼ぶ通称として音声のみで伝えられてきた。しかし，地域社会の近代化や社会構造の変化等に伴って屋号が本来の機能を失いつつある。白峰地区で言えば，命名の型の大部分を占める先祖の名やその文字表記（先祖名の漢字表記など）が理解されていた時代はよかったが，次第に忘れられる中で，屋号そのものが衰退の道をたどっている。確かに屋号は，地域外の人にとっては理解不可能なものかもしれないが，方言がそうであるように，地域社会の生活にとっての屋号の価値・役割の理解と再評価によって，新たな屋号の活用法も含めて，一定の役割を果たしうるものかもしれない。白峰雪だるまの里協議会では，当ゼミの屋号の記録の活用策の一つとして，右の写真のような屋号の表札を各戸の玄関に掲げてもらうことを検討しているが，白峰のような場所だからこそ屋号の表札は地区の一つの風景として似合うに違いない。もちろんその際，複数の屋号が記録された家については，各家の意向も尊重しながら，できるだけ伝統的屋号と思われるものを掲げてもらうことが必要にもなるだろう。

白峰の伝統的建造物の屋根を葺いた
という栗の木製の屋号表札の見本

６．調査研究の自己評価

今回の調査研究は，まず白峰地区の屋号の実態（屋号の形態）を正確に把握し，その特徴を言語学的，方言学的に分析することを目的としたが，得られた屋号データはあくまでも土地生え抜きの高年層の人たちの使用し，理解している屋号という条件付きのものであった。現代的屋号の価値・役割を考えるためにも，屋号に対する意識や屋号の理解度の世代差，個人差などについても知る必要があると考える。今後の課題としたい。

従来，言語調査の対象としてはあまり扱われることのない屋号を取り上げた今回の研究は，当ゼミ所属の多くの学生には目新しいものであったようだ。調査に参加するまで屋号の存在すら知らなかった学生もいた。調査で高年層話者の皆さんから様々な屋号を教えてもらいながら，地域社会において果たしていた屋号の役割が想像以上に大きかったことを理解した学生も多いに違いない。個人ではなく家，家族に通称として付与された屋号は，家中心の生活が営まれていた時代の名残と考えれば煩わしいもののようにも感じられるが，昨年の 3.11 東日本大震災で気づかされた家族の絆の象徴のようなものでもあったのかもしれない。調査に参加し，調査結果の整理・分析に携わったゼミのメンバーがそんなことも感じてくれていれば，意味のある研究活動になったと考える。

なお，課題のうちの「方言を理解・伝承するための『白峰方言検定』の実施」については，今年度は，数年前の試行の反省も踏まえて，来年度以降の検定の実施に向けて，雪だるまの里協議会のメンバーとその内容や実施方法等について計画を具体化する段階まででとどめることとした。

※下の写真は，9 月 26 日に桑島地区での調査を，別の取材で来ていた北國新聞の記者の取材に加藤が応じたものが翌日 9 月 27 日（火）の朝刊に記事として掲載されたものである。

2011年（平成23年）9月27日（火曜日）　県内総合

北國新聞

独自文化　まちづくりに活用

金大・加藤教授ら　初の本格調査

白峰の屋号継承へ

白山市白峰の言語文化を研究している加藤和夫金大教授（国語学）と研究生が26日、白峰の「文化遺産」である屋号を後世に残す初の本格調査を始めた。「白峰雪だるまの里協議会」が白峰の家々に屋号の表札を掲示する構想を進めており、調査は「言語文化を生かしたまちづくり」の一歩となる。

加藤教授と学生ら13人が3日間かけて、白峰地区の約300世帯の屋号や発音などを聞き取り、記録する。26日には加藤教授らが白峰公民館で地元高齢者と対面し、聞き取り調査を進めた。

住民によると、白峰地区の屋号は先祖や分家など家族の歴史と由来し、70代以上を中心に今でも使われている。昭和30年代に一部調査が行われ、「白峰村史」に収録されたが、その後、変化した屋号もあり、将来は消える可能性もあることから、白峰雪だるまの里協議会が加藤教授に調査を依頼した。

加藤教授の研究室は現地調査後に屋号を分析し、年内に資料にまとめる。同協議会は今後、地域住民に屋号の表札づくりを呼び掛ける予定となっている。

現地調査に立ち会った同協議会の山下浩代表は「白峰の屋号は独自の文化。観光客が白峰独自の歴史を感じられるよう、屋号を生かしたまちづくりに取り組みたい」としている。

住民から屋号や家の歴史を聞き取る金大生＝白山市桑島の白峰公民館

松小　子供歌舞伎の写真展

会場にお旅まつり風情

小松市大文字町鬼山若連中の「祭りを写そう写真コンテスト」（北國新聞社後援）の作品展示会＝写真＝は26日、同市文字町のギャラリーの家」で始まり、鬼山伝歌舞伎の雰囲気を伝える力作約30点が来場者の目を引きつけた。

同コンテストはお旅まつりで上演される子供歌舞伎や、祭りを盛り上げる若衆を被写体として初めて募集された。会場には出番を待つ子供や夕闇に浮かぶ鬼山、山の移動に汗を流す若衆などを捉えた作品などが並べられた。

「北國新聞」2011.9.27 朝刊記事

第一次調査を終え，宿泊先の御前荘コテージをチェックアウト後，本館玄関前で参加者全員で記念撮影（2011.9.28）